



万国外科学会（ISS/SIC） 日本支部ニュース

News of Japan Chapter of International Society of Surgery

発行：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部
〒228 神奈川県相模原市麻溝台2の1の1
北里大学東病院
TEL：0427-48-9111 FAX：0427-45-5582
発行者：比企能樹
編集責任：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部広報担当委員・村田宣夫（埼玉医大総合医療センター外科）
印 刷：Dig印刷 Tel：03-3551-3060
年2回発行 1995年4月創刊

支部長挨拶

—日本における本学会の事始め—

万国外科学会
日本支部長
比企 能樹
(北里大学東病院長)



今年の日本の秋は、のんびり紅葉や菊を愛でている場合ではないような厳しい現実となっております。有り難いことに、学問というものは如何なる状況におかれても、尚かつ歩みを止めることをしないでいられるようです。会員諸侯におかれましても、日々研鑽を積み重ねておられることとご同慶にたえません。

本年は、万国外科学会の開催は無い年ではありますが、来年は久しぶりにヨーロッパ大陸に戻り、歴史と文化のワインでの開催まで、あと1年を切るようになりました。

8月の開催まで、application やその他の手続きに遗漏なきよう、準備をお進めになり、会場で各国の注目を集めるような発表を、数多くして頂きたいと願う次第であります。

去る2月、日本文教出版（株）から『或る明治外科医のメモランダム』という本が発行されました。これは、九州帝国大学三宅速名誉教授自身による日記の抜書きを、そのままの状態で孫の進氏がタイプアップし、発行した本です。慶應義塾大学医学史の大村俊郎教授が、大変貴重な日本の外科学史の材料と評価されました。

三宅速先生は、東京帝国大学医学部卒業後 Prof. Mikulicz のもとで2回のドイツ留学を経て、明治37年（1904年）九州大学医学部の前身である京都帝国大学附属福岡医科大学の外科教授となり、胃癌、胆石症および脳外科の分野を専門とし

て、以後1913年第14回（京都）及び1925年第26回（福岡）と、日本外科学会会长を2度、務めました。

今回上梓されたこの本の、1923年（大正12年）11月5日付けの記載を引用しますと、『在ベルギー・ブリュッセル万国外科学会（本部）より、文部省を経由、余に親書を寄せ、日本支部設立に付、尽力されたしと会の規定書を同封し来る』と記されております。

これをもって、万国外科学会日本支部の始まりとなし、日本外科学会からの応募者を推薦して、万国外科学会の12名の初代日本人会員が生まれました。即ち、近藤次繁、塩田広重、関口蕃樹、杉村七太郎、秦勉吉、伊藤隼三、鳥鶴隆三、磯部喜右衛門、後藤七郎、赤岩八郎、泉伍郎そして三宅速の諸先輩であります。

そして、初めての日本代表の参加ということで、文部省より公式に要請を受け、三宅速教授は、第7回大会に向けて開催地ローマへ大正15年1月22日出発した旨、記述されています。この大会の、23人からなる各國代表の記念写真が残されております（下段写真）。

またこの件に関して詳細に記された日記から、当時、政治的な社会背景により本学会から、ドイツとオーストリアが一時除名を受けていたことが分かります。これら両国の復権に関し理事会で討議があり、独外科学会と深い関わりをもつ三宅日本代表が大いに働き、『次の第8回学会からはめでたく独徳共に復権を認められ、学会総会へ招待されることになった旨、本日在日ドイツ大使ゾルフ氏より通知が来る』と、昭和2年6月6日付けの記述に見られます。因みにこの時、日本からは新たに24名の会員を推薦したとあり、万国外科学会の日本における基盤が順調に広がっていたことも分かります。

こうして顧みますと、日本に万国外科学会の種がまかれてから、早くも1世紀近くになります。現今のように国際化が益々進む時代を迎え、日本の会員諸氏の、特に公用語の英語を自由に操る世代の先生方の活躍を、切に希望するところであります。



第7回大会（ローマ）での各國代表記念写真。左端が日本代表三宅速教授。

“第38回 International Surgical Week 1999 に向けて”

山川 達郎

（万国外科学会日本支部事務局長）
（帝京大学溝口病院外科教授）



今世紀最後の第38回 International Surgical Week (ISW 1999) は、Prof. Samuel A. Wells, Jr. (米国) 学会会長のもとに、1999年8月15—20日、Austria, Vienna (ウィーン) で開催が予定されています。すでに 1st announcement も配付されており、ご存知の会員も多いことと思います。会場は、去る8月、World Congresses of Gastroenterology が開催された Austria Center Vienna (写真) が予定されています。



2001年のこの万国外科学会は、本学会創立100周年を記念して発祥の地である Brussel に於いて開催されますが、2003年はアジア、Thailand が主催国に選ばれるに違いありません。万国外科学会日本支部会は、米国に次ぐ第2位のメンバー数を誇っています。アジアの中でのリーダーシップを持つべき日本の役割は、この Thailand の Bangkok での学会を支援して成功に導くことがあります。主催国の Thailand もアジアの仲間である日本の力を期待しているに相違ありません。最近、経済界をはじめ色々な分野の方々が、将来のアジアに目をむけています。Vienna, Brussel, そして Bangkok へと学会がめぐってくる間に、われわれはさらに力を養ってアジアでのリーダーシップを發揮しなくてはなりません。そのためには、今、直ぐにでもそのための行動をおこす必要があります。会員諸兄がウィーンの学会に積極的に参加して活躍してくださることを期待して止みません。

さて、ウィーンは、“音楽の都”、“森の都”、“バロックの都”として知られる文化の香り高い美しい都で、2000年以上の歴史をもち、オーストリア・ハンガリー帝国時代の栄光の都と称えられている街です。今でもヨーロッパの東西と南北を結ぶ十字路にありニューヨーク、ジュネーブに次ぐ国連都市として栄え、世界の人々に親しまれています。旧市街の中心にはウィーンのシンボルである有名なシュテファン大寺院や国立オペラ座が、また王宮、博物館、ウィーン大学などがあります。“美しき青きドナウ”や“ウィーンの森の物語”にうたわれた詩情が、バロック建築とよく調和して本当にロマンティックな雰囲気のする街だと聞いています。ハイドン、モーツアルト、ベートーベン、シューベルト、ヨハン・ストラウスその他、数多くの作曲家がひしめくウィーンのあでやかな音楽史の一端には、王宮、美術館や博物館あるいは数多くの劇場で行われているオペラやオーケストラなどを通じて接することができるに違いありません。

一方、ウィーンは、医学史上でも精神分析学のフロイトやビルロート、ロキタンスキイなど多くの医学者が活躍した医学のメッカであると言われています。ウィーン大学医学部を中心とした長い歴史の中に育まれた伝統はキャンパス内の記念館や博物館あるいは Federal Pathologic-anatomical Museum などの医学関係の博物館で接することができると思います。

来年、開催のこの学会を逃すと暫くはウィーンを訪れる機会はありそうにありません。学会での勉強も大切ですが、この機にかけて隆盛を極めたヨーロッパの都・ウィーンの歴史に接することも一興ではないかと思われます。

抄録提出のデッドラインは、本年の12月11日です。E-Mail で送ることもできますが、その場合には Original の抄録を12月末日までに提出することが義務付けられています。

提出先の住所は下記の通りです。多数の先生方のご参加を期待しています。

Scientific Secretariat ISW
c/o ISS/SIC
Netzibodenstrasse 34
PO Box 1527
CH-4133 Pratteln,
Switzerland

特別寄稿

国際学会の思い出

土屋 涼一

（長崎大学・島根医科大学名誉教授）



国際消化器外科学会第3回世界大会 Collegium Internationale Chirurgiae Digestivae 3rd World Congress (CICD) は、Illinois 大学外科教授 Lloyd M. Nyhus を会長として1974年10月10、11、12、13日 Chicago の Hyatt Regency Hotel にて開催された。これが小生が参加した最初の国際学会である。小生は1959年7月より2年8ヶ月 USA に留学したが、1961年度は Seattle の University of Washington, Department of Surgery における Research Fellow であった。その時の直接の上司が当時 Associate Professor であった Nyhus 教授だった。その為か学会のハイライトである6つのパネルの1つにパネリストになるよう命じられたのである。本学会に応募された演題総数は212であり、そのうち37題が日本のもので17.4%を占めていた。Oral presentation に採用されたのは212題中83題39.2%であったが、日本の場合は37題中18題で実に48.6%におよんでいた。フィルムシンポジウムにおいても、28題中7題が日本学者の発表であり、さらに6つのパネルのうち4つまでわが国の学者が参加したのである。これは日本からの応募演題数が多かったのみならずその内容がすぐれていたためであろう。公用語は英、仏、スペイン語であった。日本学者はみんな英語を用いたが、よく活躍された。しかし中には残念ながら質問に答えずただ一途に沈黙を守る人が見受けられた。同じパネリストであった Barcelona の LaCall 教授がパネルの打ち合わせの時、英語で講演すると本国の者が怒るのでスペイン語で話すが司会者が英語でやれと要請してくれればいつでも英語にすると言ったのには驚くと同時に我々日本人もこのように言えるようになりたいと思った。

その後、毎年のように海外出張し国際学会に参加してきたが、1977年9月5日から5日間にわたり京都において第27回万国外科学会 International Society of Surgery (ISS) が開かれた。会長は英国の T. Holmes Sellors であったが組織委員長は齊藤漠日本医科大学名誉教授であった。当時の新聞によると日本の外科学が国際的にたかいレベルにあることを認められ今回、アジアで初の開催。参加者はイギリス、アメリカ、西ドイツなど45か国約700人、日本からは300人で、約280題が発表された、とある。この折小生は ISS に入会した。

1982年9月6～9日国際消化器外科学会第7回世界大会が慈恵医大外科長尾房大教授を会長として東京の京王プラザホテルにて盛大に挙行された。本学会によって名実共に我が国の消化器外科の水準の高さを世界に示すことができたのであり、故長尾教授の功績は大と言わねばならない。

1987年1月15～17日 CICD 第1回日韓合同部会を小生は長崎東急ホテルにて開催した。これは長尾房大、井口潔、韓国の金鎮福の諸先生と相談し、CICD の東アジア部会の第1歩としてまず韓国と日本で集会を持つ事にしたからである。その後台湾が加わったが以来、3国の消化器外科医の強い絆がむすばれたと思われるようこんでいる。第2回はソウルついで台北、第4回が1995年東京で、そして1999年には再びソウルで開催される。1988～1990年小生は国際臓器学会の会長に選ばれ、1990年8月20日から23日にわたって、第4回集会をホテルニュー長崎にて開催した。わが国の臓器研究の水準が十分紹介され、同時に国際臓器学会も持たれ大変有意義であった。1990年は小生が長崎大学を退官した年であったが、4月には Regional pancreatectomy のシンポジウムに招かれニューヨークへ、10月には ACS のパネルの演者に選ばれサンフランシスコへ、さらに11月には CICD の第11回世界大会の招待講演者としてニューヨークに行かねばならなかったまことに多忙の年であった。

昨年6月アジア肝胆脾外科学会第4回大会が東京で開かれ、今年は国際臓器学会第8回集会が7月にやはり東京で開催された。非常に印象的であったことは、日本の若い人の発表も討論も大変流暢であったことであり、質問の意味が分からずただ沈黙を守るというようなことはもはやみられず、力強く感ずるとともに心から嬉しく思った次第である。

多価・酵素阻害剤
ミラクリット注射液
健保適用
指定医薬品、要指定医薬品⁽¹⁾
MIRACLID Inj. (一般名:ウリナスタチン) 25,000/50,000/100,000単位

【警告】
本剤の投与は緊急時に十分対応できる医療施設において、患者の状態を観察しながら行うこと。

【禁忌 (次の患者には投与しないこと)】
ウリナスタチン製剤に対し過敏症の既往歴のある患者

【効能・効果】	【用法・用量】
急性胰炎(外傷性、術後及びERCP 後の急性胰炎を含む) 慢性再発性胰炎の急性増悪期	通常、成人には初期投与量として1回25,000～50,000単位を500mLの輸液で希釈し、1回当たり1～2時間かけて1日1～3回点滴静注する。以後は症状の消退に応じ減量する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。
急性循環不全(出血性ショック、細菌性ショック、外傷性ショック、熱傷性ショック)	通常、成人には1回100,000単位を500mLの輸液で希釈し、1回当たり1～2時間かけて1日1～3回点滴静注するか、又は、1回100,000単位を1日1～3回緩徐に静注する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。

※詳細は添付文書をご参照下さい。

<資料請求先>
持田製薬株式会社
東京都新宿区四谷1丁目7番地
電話(03)3358-7211(代) 〒160-8515

万国外科学会 第5回日本支部会総会議事録

1998年4月9日午前7:30から8:30 於 東京国際フォーラム G405号室

1. 比企能樹日本支部長の挨拶
2. 出月康夫前万国外科学会会長挨拶
The 38th World Congress of Surgery (Vienna) に関する報告
応募抄録の締切りは、1998年12月11日と決定された。
3. 庶務報告
 - 1) 会員異動状況（1997年12月31日現在）
会員数は262名（正会員252名、特別会員10名）である。
新入会員数は28名、退会会員数は8名で、増員20名であった。
 - 2) 1997年度日本支部活動報告
4. 広報委員会報告
特別寄稿をして頂いた先生に対して、記念品を贈呈することとした。
5. 1997年度会計報告
収入合計2,166,809円、支出合計929,582円で、当期収支差額1,237,227円を次期繰り越し金とした。
6. 1997年度監査報告
7. 1998年度予算案
 - 1) 収入の部
会費収入1,300,000円、広告収入400,000円、前年度繰り越し金1,237,227円で、収入合計2,937,247円を予定している。
 - 2) 支出の部
会議費300,000円、通信費300,000円、印刷費500,000円、文具費50,000円、交通費50,000円、人件費150,000円、他誌広告費100,000円、雑費10,000円、予備費150,000円で、支出合計 1,610,000円を予定している。
8. 会則（英文）の承認
9. 財務担当の承認
10. その他
出月康夫教授より International society of surgery foundation への寄付金のお願いがあった。この寄付金は、開発途上国の若いドクターを毎年数名ずつ World Congress of Surgery への参加させるための費用として使用されることである。

参加者（順不同、敬称略）

清水一雄 前原喜彦 掛川暉夫 石川正昭 平山廉三 出月康夫 比企能樹
村田宣夫 鳴尾仁 山川達郎 北野正剛 中川原儀三 橋爪誠 橋本大定
馬場正三 酒井滋 青山法夫 大谷吉秀 秋丸琥甫 田尻孝 宮島伸宜 丸
野要 小高明雄 北島政樹 高見博 長町幸雄 許斐康熙 松本純夫 梨本
篤 村尾佳則 松本由朗 高橋俊雄 丸田守人 土屋涼一 山岡義生 幕内
博康 二村雄次 小林国男 信田重光 原口義座 白日高歩 安富正幸 沖
永功太



新会員紹介 1998年9月までに入会された先生方

医師名	病院名
杉原健一	東京医科歯科大学医学部第2外科
市川 渡	東京医科歯科大学医学部第2外科
国崎主税	横浜市立大学医学部第2外科
中村卓郎	東京大学医学部附属病院分院外科
三村芳和	東京大学医学部附属病院分院外科
比企直樹	東京大学医学部附属病院分院外科

医師名	病院名
前田耕太郎	藤田保健衛生大学医学部外科
大島行彦	屏風ヶ浦病院院長
廣瀬 仁	新東京病院心血管外科
仁瓶善郎	東京医科歯科大学医学部第2外科
長谷貴将	滋賀医科大学救急部
山田博文	埼玉医科大学総合医療センター外科

編集後記

今回もまた3名の著名な先生方にお忙しいなか特別寄稿をしていただいた。これから世界にはばたこうとしている若い外科医を勇気づける貴重なエッセイで感謝申し上げます。

◆周知のように万国外科学会の次期学術集会は来年8月オーストリアの首都ウィーンで開催される。そのInternational Surgical Weekに参加するべく、皆様も準備されていると思う。デッドラインは12月11日である。E-mailがその日に届いてもよいということなので締切間近の仕事に慣れている先生には多少のゆとりがありそうだ。ただしE-mailだけでは受理されない。通常の演題申し込み用紙が12月末目ま

でに届かねばならないことを忘れずに。◆ウィーンというと音楽、絵画、建築の都であり、歴史的にはハプスブルグ家を思い出す。古い映画ファンの者には「第三の男」の街である。しかし外科医にとっては胃切除後再建術式で有名なビルロート(Theodor Billroth)がウィーン大学にいたことを忘れてはなるまい。彼が胃切除術を最初に成功させた。ただし成功させたのは彼の周りの医学レベルが高かったことにもよるだろう。ISSの現会長であるSamuel A. Wells Jr.の挨拶文にはこのウィーンで近代外科学の臨床と外科理論が発展したことを特に強調している。日本からは遠いけれども是非とも演題をパスさせてウィーンに出かけ、外科の先達が活躍した都市でいい講演をしたいものである。もちろんウィーンの文化にも少し触れたい。（村田宣夫）